4. モラエスの「風土」（３）～「盆踊り」考～

宮崎　隆義

1

モラエス(Wenceslau José de Sousa Moraes, 1854-1929)は、同時期に日本に滞在し没したラフカディオ・ハーン（Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904）を尊敬し、ハーンと同様に盆踊りを題材として『徳島の盆踊り』(*O "Bon-Odori" em Tokushima*)を書き残している。ハーンの「盆踊り」('Bon-Odori') そのものは、作品として高い評価が与えられているが、モラエスの「盆踊り」に比べれば分量的にはかなり短い。しかしながら、ハーンを尊敬し敬愛していたモラエスが、その作品の本質に共感して長大な『徳島の盆踊り』を書いたとすれば、その両者に見られる共通のものと、これまでハーンとモラエスの眼差しの違いを述べてきた点からの違いを再度確認すれば、モラエスの『徳島の盆踊り』が含んでいる側面が浮かび上がってくるものと思われる。

本論考では、「風土」という観点から、モラエスが描いた「盆踊り」とハーンの「盆踊り」を比較してその根底にうかがえるふたりの違いを考察したい。

2

「風土」ということについては、これまで和辻哲郎の『風土』（1935）をもとに、モラエスとハーンとの親和性や違いを述べてきた[1]。前稿では、ハーンのまなざしとモラエスのまなざしを、主にふたりの境遇から検討してみたが、そこからうかがえるのは、ジャーナリストであったがゆえに、ジャーナリスト的な視点と態度で、そして後にお雇い外国人教師となった立場のまなざしで松江を眺めているハーンと、ポルトガル海軍の士官、後に神戸でポルトガル総領事となりながらも、それらの社会的地位や境遇をかなぐり捨てて地方都市である徳島の地で四軒長屋に住み、庶民の中に潜んで暮らしたモラエスのまなざしとの違いであった。その違いを更に念頭に置きながらハーンの「盆踊り」を読んでみると、通訳を従えてのハーンの観察はあくまで好奇心に満ちたジャーナリストの態度であろうと言ってよい。たとえば以下の引用でも明らかである。

> とある小さな村で、大きな神社へ通ずる鳥居をくぐったところで、一風変わった小さな祠が目に留まり、私は好奇の一念からどうしてもそれをのぞいてみる気になった。

[1] 拙論「モラエスの「風土」（２）～ハーンの轍を踏みながら～」『平成 30 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書—異文化に照らし出された四国～外国人ならびに国際的に活躍した四国出身者の残した文献の調査・研究から～』（第一資料印刷株式会社，2019 年 3 月），pp. 48-56, 参照。

祠の扉は閉ざされていて、小さな棍棒といった感じの、節くれだった短い棒切れが何本もずらりと立てかけてあった。おそれおおくもそれを取り除け、小さな戸を開けて、アキラは私に中をのぞいてごらんという。中には、面が一つあっただけである。天狗の面だった。鼻がばかでかく、そのグロテスクな様は、ちょっと言葉で言い表すことができない。余りの醜怪さに、見なければとよかったと私は後悔したくらいである。(78-79)[2]

上記の引用では日本語による翻訳を紹介しているが、もちろんハーンは英語で書いている。後に日本女性と結婚し日本に帰化したハーンであるが、作品の執筆自体はもちろん英語である。それは非日本語圏の外国人が、日本の風物に触れ、それを紹介するという形で英語という言語に日本の風物、そしてそれに関わる日本人の心性を英語という言語に内在化することでもある。今、上で日本語の翻訳を紹介したが、我々読者は、ハーンの書いた英語を再度日本語化することによってハーンの心性を日本語に内在化する作業を行っていることになる。そこに生じているはずの微妙なズレあるいは誤解というものを、我々読者は当然知っているがゆえに、無意識のうちに、あるいは笑みを浮かべながら鷹揚に簡単に修正してしまう。日本語を日常使用している日本人として、日本語に翻訳されたハーンの文章から、ハーンの目を通して日本の「風土」を見ているが、その目には実は我々日本人の目が寄り添い重なりあっている。先に述べた翻訳を通して生じている微妙なズレや誤解を、外国人だからということで寛容に修正し許容しているのである。ある意味ではそれもまた我々日本人の心性といえるのかもしれない。

ハーンの「盆踊り」は、通訳や案内人を連れての見聞の記録である。『知られぬ日本の面影』(*Glimpses of Unfamiliar Japan*, 1894)に収められたこの小品は、日本にやってきたときのハーンのみずみずしい感動にあふれた印象記であるが、特に横浜から出雲の松江にやって来たときの印象記の一部でもある。先の引用では「アキラ」という人物が、ハーンを案内し、ハーンが興味を持ちそうなものを見せようとしている。私たちの中にも、小さな祠に何が収められているのか、子供心に好奇心に駆られてこっそりと覗いた経験を持っている人はいるであろう。筆者も天狗の面が収められているのを見た覚えを持っているけれども、その時に感じたものは、ハーンが感じたものとは違っている。確かに、日本の土地で生まれ育っているがゆえに、話やら絵で、あるいは写真で目にしていたものとあまり変わらぬものか、あるいはもっと粗末で貧相なものであったように記憶している。好奇心の強さに見合うほどの驚きや意外さの印象は乏しく、むしろつまらなさを感じたものである。

個人的な記憶を引き合いに出して恐縮ではあるが、実はそこに潜んでいる印象の違いがハーンのまなざしを理解するうえで意味があろう。ハーンは異国である日本にやって来ているが、そこで目にしているものから、実は自分の過去の記憶を引き寄せている。「盆踊

[2] 小泉八雲，平川祐弘編『神々の国の首都』（東京：講談社学術文庫 948，2013 年。以下，本文中の引用はこれに依り，引用文のあとに括弧で頁を示す。

り」の冒頭は次のように書かれている。

> 神代そのままの国、古い神々の国、出雲へ行くには、幾つも山を越えなくてはならない。太平洋岸から日本海岸へと、強力の車夫をとっかえひっかえ、俥で四日の旅である。いちばん距離が長くて、いちばん人が通らない道を選んだからである。
> この長い道は、大部分が谷間を縫うように続いている。谷はさらに高い谷へと開け、それにつれて道ものぼり、山と山とに挟まれた稲田の谷は、畔をめぐらした台地の段々につれて上へ上へと続き、巨大な緑の階段でも見るようである。その上には松や杉の薄暗い森が影を作り、この樹木におおわれた山々の頂の上には、さらに遠い連山の藍色が浮かび出て、そのまた上にぼうと灰色に霞んだ山脈のシルエットが重なっている。(76)

牧野陽子氏の「松江のハーン（１）—『盆踊り』と『神々の首都』—」[3]によるまでもなく、ハーンの旅は一種桃源郷への旅の様相を帯びている。横浜から裏日本山陰の地方都市松江の寒村への旅は、理想郷への旅でもあり、それはハーンの精神的な過去の思い出への旅でもある。それゆえに、彼が目にする異国のこまごまとした風景に故郷の風景を重ねている。

> 旅を続けてゆくにつれて、日々、景色が美しさを加えてゆく—火山国特有のあの変幻自在の風光美である。昼なお暗い松と杉の森、遠くほの霞む夢のような空、日に柔らかな白い日射し—こういうものがなかったなら、私はふたたび西インド諸島にあって、ドミニカ島やマルティニーク島の丘の、つづら折りの道を登っているのではないか、ふとそんな思いに誘われることが時折だった。実際私は、光り輝く地平のかなたに、棕櫚やパンヤの樹影をいつしか探し求めているのであった。(80)

ハーンが目にしている日本の風景に、彼の過去の記憶の風景を重ねていること、これは和辻が『風土』で述べた「風土」の定義とある意味では一致していると言ってもよい。

> ここに風土と呼ぶのはある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である。それは古くは水土とも言われている。人間の環境としての自然を地水火風として把捉した古代の自然観がこれらの概念の背後にひそんでいるのであろう[4]。

前論文また前々論文でも述べたように、和辻の考える「風土」というものは、人間存在を「個であるとともに全であるごとき人間存在の根本構造」として、「空間性・時間性」

---

3 『成城大学経済研究』東京：成城大学経済学会（編），pp.89-119, 1989 年。
4 和辻哲郎『和辻哲郎全集　第八巻』（岩波書店，1989 年），p. 7.

を含んだものである。視覚の対象として風景をただ物理的に表面的に眺めた空間として捉えるだけでなく、そこに「時間」の要素を加えること、つまり過去を内在した空間として捉えることと言ってよいだろう[5]。上掲の引用で、ハーンが「ふたたび西インド諸島にあって、ドミニカ島やマルティニーク島の丘の、つづら折りの道を登っているのではないか、ふとそんな思いに誘われる」と書いているように、ハーンは目の前の風景に自分の過去の思い出を重ねている。牧野陽子氏も指摘しているが、俥に乗って「つづら折りの道」をゆき、突然開けた谷間に村を目にすることは、山の楽園である桃源郷に至る道程となっている[6]。

> 大きな山を巻くようにして続いていた道が、突然下りになったと思ったら、やがて、高くとがったわら葺き屋根と青苔の生えた軒の見える谷間が開けてきた。—古い広重の画集の中にでも出て来そうな村だった。村落全体の色調が風景の色調にしっくりと和している。これが伯耆の国、上市だった。(84)

俥に乗って通訳が案内してくれる場所をハーンは訪れて、そこの空気、音、匂いを味わっている。そして彼が目にしている風景は、ヨーロッパに伝えられた日本の、切り取られ誇張された風景である。ハーンも、モラエスと同様に、ヨーロッパに輸出された陶器や屏風、漆器に描かれた日本の風景を見ていたことがうかがえる。目の前の風景を見ることは、自分が過去に目にしていたものの再確認であり、その目にしたものを通して想像し作り出していたものとの同異の確認でもある。

モラエスがハーンと同じように日本に初めてやって来、魅惑の日本の風景に接したときの様子も過去に見たものの記憶の確認であった。

> 瀬戸内海、インランド・シイ、これだけで、充分、日の出の帝国を定義できるだろう。船が本州、九州、四国の島々を縫って進むとき、海水を浴びている無数の小島が散在するので、少しも陸地を見失わないで、しょっちゅう沿岸のなぎさ近くを航行することになる。あおあおした島々の風景、バラ色の風景、火の色の風景、そのうえ、驚く

---

[5] 拙論「モラエスの「風土」～ハーンとの親和性～」『平成 29 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書—異文化に照らし出された四国～外国語文献の調査・研究から～』（徳島：教育出版センター，2019 年 3 月），pp. 41-49，並びに拙論「モラエスの「風土」～ハーンとの親和性～」『平成 30 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書—外国人ならびに国際的に活躍した四国出身者の残した文献の調査・研究から～』（第一資料印刷株式会社，2019 年 3 月），pp. 48-56，参照。

[6]「風景が展開し，自分のたどってきた道筋がわからなくなる「つづら折りの道」とは，方向感覚を失わせる一種の迷路であり，新世界ないしは異世界へ行くときの古今東西共通の文学的符号だからである。その代表的なものが桃源郷伝説だが，ほかにも日本でいえば泉鏡花の作品から最近のＳＦファンタジー作品まで，いくらでも例はあげられよう。」(93)，「迷路のような山道が終わると，突然視界が開け，そこに広大な別世界がみえる。これもまた，桃源郷に代表される異世界出現の伝統的方法である。」，牧野陽子「松江のハーン（１）—『盆踊り』と『神々の首都』—」（『成城大学経済研究』成城大学経済学会（編），pp.89-119, 1989 年），p. 94.

ほど密集している杉の緑の茂み、鏡のような海面からぽっかり浮かんでいる気まぐれで小さい岩山、きものを着て道路を横切ったり畑を耕している男女、ヨーロッパに輸出する陶器や屏風や漆器の空想的題材になっている光と姿に包まれた全景、それらがすべて、つぎつぎにこの商船が進んでいく海上に姿を現してくる。これこそ、日本である。日本には荘厳な風景はないし、豪壮さもない。ここにあるのは、こまごました背景、驚嘆すべき細心な天然の配慮がはてしなくつづいて、神秘な空想の国、幻想の国にしている風景の配列の妙である。この国は、母である土地を離れて他の天体の秘境にはいったような気がして、この世にありえないものが現実にありうるものになっている[7]。

モラエスが船で、長崎から瀬戸内海を経由して神戸や横浜へと向かった経路は、大まかにはハーンの松江行と同じようなものといってよいだろうが、ハーンの旅が一種桃源郷への旅と過去の記憶への旅であるのに対し、モラエスの旅は、新たな世界、未知の世界への旅である。長崎に初めて降り立ったときのモラエスの思いは、噂や読み物から想像で作り出ししていた新天地、あるいはそれ以上の世界の発見の喜びと高揚感であった。

ぼくはすばらしい国、日本にいる。ここ長崎で世界に比類のないこれらの木々の陰で余生をおくれたらと思う。・・・みごとな景色、花々、ほほえみにみちた、神によって祝福されたこの土地・・・　（1889 年 8 月 13 日、エミリア宛）[8]

モラエスがそうした高揚感と、新世界へのあこがれと希望に胸を膨らませながら、瀬戸内海をゆく船上から見た風景は、「ヨーロッパに輸出する陶器や屏風や漆器の空想的題材になっている光と姿に包まれた全景」の確認であるとともに、これまでの誤った印象の修正と新たな発見の旅でもある。モラエスの旅は、いわば大航海時代のポルトガル人のように、新世界発見の希望と高揚感に満ちた旅の様相を持っているといってもよい。それに対し、ハーンの旅は、一種桃源郷への旅であり、それがまた精神的な過去の記憶への旅という、ある意味で退行的で沈潜的な側面を持っている。

来日後、他の外国人が未だ見ることのない日本の姿を追い求めていたハーンは、荘厳な寺院とは対照的な場所、素朴で、儚げで、しかし確実に生きている人々の信仰に、胸を打たれた。近代化、西洋化を目指し、国家が一方向の宗教政策に乗り出した時、そこに残された、小さく強い神と仏に心を奪われたのである。

そしてここで注目したいのは、計 14 年の日本滞在のうち、前半に書かれたこれらの文章には常にギリシアの影が付きまとっていることである。・・・

7 花野富蔵『定本モラエス全集 I』（集英社，1969(昭和 44)年），pp. 105-106。
8 岡村多希子『モラエス—サウダーデの旅人』（モラエス会，2008 年），pp. 552-53。

・・・・・・・・・・

つまり、ハーンにとって、特に日本滞在の初期段階においては、目に映る奇奇怪怪で神秘的な事物が、どこか懐かしいものとして心に響いていた。彼の郷愁の対象が、イギリスやアメリカではなく、母の祖国ギリシアであったこと、そこには出雲の地同様神々が存在していたことから、出雲の地は、常にギリシアと類推されながら彼の中に映っていた。そして、ギリシアを媒介にして捉えられた場所、—出雲地方を含む松江の地—は、彼の知の集積所—トポス—に強く記憶され、その後の視点や、執筆活動においても反映されていくことになる[9]。

ハーンは、過去の異国からの旅行者の印象と同じく、土地を、そしてそこに住む人々を「お伽の国」に住む「お伽の国の人々」の印象として重ね捉えている。それは異国ではありながらも、現実の世界の裏側か別の次元に隠れ潜んでいる別の世界の発見、ユートピアへの旅とその見聞である。

日本の土を踏んだ日の印象を語るとなると、みな、申し合わせたように、この国をお伽の国、そこに住む人々をお伽の国の人々と呼ぶ。しかし、もっと正確な表現が不可能に近いことをまず書こうとすると、期せずしてその文句が同じになってしまうのは、自然の理というものである。すべてがわれわれのところよりも、こじんまりと優雅にできている世界、—小柄で、見るもやさしそうな人々が、幸福を祈るがごとく、そろって微笑みかけてくる世界—あらゆる動きがゆったりと穏やかで、声をひそめて語る世界—土地も人も空も、これまでよそで見て知っていたとは似ても似つかぬ世界—そんな世界にいきなり身を置くとき、イギリスの昔話ではぐくまれた想像力の持主なら、昔見た妖精の国の夢がとうとう現実になったと思うのも無理はない。　(14)[10]

ハーンが幼少期に過ごしたアイルランド、あるいはもっと広くイギリスやヨーロッパには妖精の存在とその世界を信じる伝統的なといってもよい傾向がみられるが、ハーンの思いもその域を外れてはいない。「イギリスの昔話ではぐくまれた想像力の持主なら、昔見た妖精の国の夢がとうとう現実になったと思う」というハーンの言葉は、日本の山陰の小都市松江の世界が、ハーンの根底にあるギリシアやアイルランド、イギリスの世界のどこかに隠され秘められているファンタジーのユートピアの様相を呈していることを示していると言えるだろう。

3

先の引用で、「アキラ」は、ハーンに日本的なものを努めて見せていることがうかがえ

[9] 三成清香「ハーンと日本の原風景—松江—」（宇都宮：宇都宮大学『外国文学』，No. 62，2013 年，pp.77-94）。
[10] 小泉八雲著，平川祐弘編『神々の国の首都』（東京：講談社学術文庫 948，2013 年）。

る。天狗の面は、日本人にとっても異様なものではあろうが、当時知らない者はいなかったであろう。それを、異国の人間に見せたらさぞ珍しがるだろうという思いが「アキラ」にはあったはずである。そこには、私たちが外国人に対して抱く感情と通じているものがある。好奇に駆られて、いかにも日本的なものと思われるものを外国人に見せて、その反応をうかがおうとするところがある。ハーンが天狗の面を見て、「余りの醜怪さに、見なければとよかったと私は後悔したくらいである」との思いを露わにしているが、外国人にとって珍しいだろうという「アキラ」の思いと、それを受けて「余りの醜怪さ」と感じてしまうハーンの感覚にはおそらく超えがたい溝があろう。我々日本人は天狗の面を奇怪なものとは思いつつも「余りの醜怪さ」をたたえたものとまでは思わないのではと思われる。それと同時に、ハーンのその思いは、桃源郷の世界、ファンタジー的なユートピアの世界を眺めている以上、「醜怪」なものや不快なものがあることは予想も期待もしておらず、その思いが「後悔」の念につながっているのである。

4

モラエスは、徳島の伊賀町に紹介してもらった四軒長屋に隠棲し、ポルトガルの知人たちには精神的な病を患って孤独のうちに生涯を終えたとの印象が持たれている。だが、実際には、徳島にやって来たモラエスの第一印象は、まるで初夏の新緑に包まれたような清々しくも美しいというものであった。

> 夏の晴れた日の午後—正確に言うと、一九一三年七月四日の午後—船を下りて、私のために用意されたごくささやかな住所に歩いて行ったときに受けた徳島の第一印象は、これ緑・・・・・という圧倒的な、だが快い印象であった！陶酔した瞳の中にどっと入り込む緑、ふるえる鼻孔にどっと流れ込む緑。緑、緑、緑一色！・・・・・何ひとつ考えることをゆるさない、まことに強烈な、排他的な印象。色と香りによって生み出された陶酔感とでも言えよう。　(59-60)[11]

モラエスがやってきた頃の徳島には、モラエスを含めて西洋人は 4、 5 人しかいなかったというし[12]、その西洋人たちとの接触すらもモラエスは極力避けていたようである。そうしたモラエスの、いわば潔いとも言える過去やしがらみとの決別は、逆に、桃源郷、ユートピアを潜在的に求め、同時に過去の記憶の幻想を求めているハーンとは違い、先入観や偏見から解き放たれたまなざしにつながっていると言えるだろう。

モラエスの『徳島の盆踊り』は、尊敬するハーンの印象記に倣い、いかにも真似をしているかのように書かれてはいるが、ポルトガルの『ポルト商報』に 68 回に分けて連載された後に単行本化されている。単行本化を想定して書かれた『徳島の盆踊り』は、日本語

[11] モラエス著，岡村多希子訳『徳島の盆踊り』（徳島：徳島県立文学書道館，ことのは文庫，2010 年）。
[12] 同上，p. 59.

訳版の目次を眺めただけでも入念に計算されて構成されていることがうかがえる[13]。ハーンはジャーナリストであったけれども、モラエスもある意味ではジャーナリストであり、また、極めて有能な軍人であり外交官、領事でもあった。『徳島の盆踊り』が「随想記」として書かれているのは、ハーンの「印象記」を意識してのものであろうけれども、ハーンが日本の風景から自分の過去の記憶の世界に沈潜し、日本の風景にユートピア的な世界を重ね合わせて自分の幼少期の世界に逍遥しているのに対して、モラエスの『徳島の盆踊り』は、自分の過去を捨て去って、新たな仏教的な世界に踏み込み、そこから輪廻転生と死者との共存という、日本や徳島の人たちの世界に入り込んでいるのである。

参考文献：

岡村多希子『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官』、彩流社、2000 年.

小泉八雲、平川祐弘編『明治日本の面影』、講談社学術文庫、1990 年.

ジャネイロ、アルマンド・マルチンス著、野々山ミナ子・ 平野孝国訳『夜明けのしらべ—モラエス・人と作品』、五月書房、1969 年.

花野富蔵『定本モラエス全集 I 』、集英社、1969 年.

原田照史「和辻美学の先駆者達—ハーン、ニーチェ、ワーグナー—」『和辻哲郎全集月報 8 』

深澤暁「サウダーデとポルトガル人」『天理大学学報』、第 65 巻第 1 号、2014 年.

牧野陽子「松江のハーン（1）—『盆踊り』と『神々の首都』—」、『成城大学経済研究』、成城大学経済学会（編）、 1989 年.

三成清香「ハーンと日本の原風景—松江—」、宇都宮大学『外国文学』、No. 62、2013 年.

宮崎隆義「モラエスの「風土」～ハーンとの親和性～」『平成 29 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書—異文化に照らし出された四国～外国語文献の調査・研究から～』、教育出版センター、2018 年 3 月.

———. 「モラエスの「風土」（2）～ハーンの轍を踏みながら～」『平成 30 年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進報告書—異文化に照らし出された四国～外国人ならびに国際的に活躍した四国出身者の残した文献の調査・研究から～』、第一資料印刷株式会社、2019 年 3 月.

モラエス、ヴェンセスラウ・デ著、岡村多希子訳『徳島の盆踊り』、徳島県立文学書道館（ことのは文庫）、2010 年.

———. 『極東素描』、モラエス研究会、2018 年.

和辻哲郎『和辻哲郎全集　第八巻』、岩波書店、1989 年.

Moraes, Wenceslau José de Sousa, *O "Bon-odori„ em Tokushima (Caderno de impressões intimas)* LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916.

[13] 『徳島の盆踊り』, pp. 8-15.

———. *Ó-Yoné e Ko-Haru*, EDIÇÃO DE A «RENASCENÇA PORTUGUESA», PORTO, 1923.